

陸軍愛国号献納機調査報告

その2【献納概況、さまざまな献納者】

横川裕一



九一式戦闘機の愛国第1号、愛国3「小布施」号、製造番号114、九一戦の14号機である。

愛国小布施号

愛国1、2号に続く愛国3～5「小布施」号は、個人献金によるもので、献納者は小布施（こぶせ）新三郎氏。氏は当時60歳、東京の株式仲買人だった。

一月末か二月初めの某日、商人風の老人（小布施氏）が陸軍省徴募課を訪れ「飛行機を献納したいのだが、価格はいくらくらいでしょう」と尋ねたので、「戦闘機でも七万円位です」と答えたとところ、突然二月五日の朝になって15万円を陸軍省に持ち込んで来たのである。（『国防献品記念録』より）

これにより、九一式戦闘機と八八式軽爆撃機の献納が決まったが、15日にも氏はさらに8万円を投じて、八八式偵察機1機を献納しようと申し出た。

小布施氏からの献納3機は、昭和7年3月6日、代々木練兵場で命名式が挙行された。この3機にはいずれも「愛国○（小布施）」（○はアラビア数字）と記入されており、本機以降「愛国の標記と番号等とを記入し、その次に括弧を付し献納者の姓名か地方名、団体名を記入す」（陸普第一四二五号、昭和7年3月11日）となる。

この小布施号3機は、戦闘機（愛国3、九一戦）、軽爆機（愛国4、八八軽爆）、偵察機（愛国5、八八偵1型）で

あったが、写真1からも分かるように、命名式では軽爆機のはずの愛国4号機に偵察機（2型）が使われている。当時の軽爆機は川崎でのみ製造（石川島は、昭和7年6月より転換製造）で、命名式には都合がつかなかったことから、偵察機（こちらは、昭和6年8月から石川島で転換製造）を充てたということであろう。

愛国4号、5号は式後ただちに満洲に出発、2日後の8日午後2時40分には奉天に到着し、実戦任務に就いた。このうちの愛国5号機は3月30日にハルビン飛行場を飛び立った後に消息を絶ち、4月8日に焼却された姿が発見される。

然るに越えて4月上旬、第5号機は北満方正地方で匪賊討伐作戦参加中不幸遭遇したので、小布施氏はまたまた4月11日朝陸軍省に来訪、「愛国5号機は献納してからお国の為に働いた期間が短かく焼かれてしまったのは残念です。5号機に代って更に働いて頂きたい為今一機新鋭機を献納したいと思います」と三度価格7万円の戦闘機1機の献納を申し出られたのです。（『国防献品記念録』より）

これが愛国37号となるが、氏が献納したのはこの4機にとどまらず、知られている分では計10機を献納している。当時「愛国号献納王」と呼ばれ、その

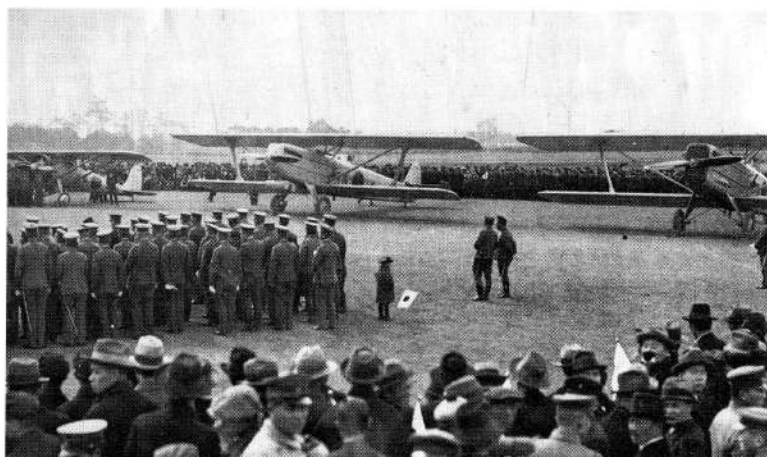


写真1. 愛国「小布施」号の命名式。左から愛国3（九一戦）、愛国4（八八偵2型）、愛国5（八八偵1型）。軍の書類では愛国4は八八軽爆だが、写真は八八偵2型である。

総額は合計77万円に達している。

- ・愛国3 (九一戦)、4 (八八軽爆)、5 (八八偵1型)
- ・愛国37 (九一戦)
- ・愛国137~140 (九五戦×4)、141~142 (九四偵×2)

愛国号献納概況

このように始まった献納機運動は、期間的に次に大別できる。

- ・第1次献納ブーム (昭和7年~9年)
- ・第2次献納ブーム (昭和13年~15年)
- ・第3次献納ブーム (昭和17年~)

(1) 第1次献納ブーム (昭和7~昭和9年ごろ)

〈歴史背景〉 昭和4年10月・世界恐慌、昭和5年1月・金輸出解禁や同年秋の豊作による米価暴落と昭和恐慌、昭和6年9月・柳条湖事件 (満州事変へ発展)、昭和7年2月・上海事変、昭和7年3月・満洲国独立宣言、昭和8年3月・国際連盟から脱退

愛国1号、2号をきっかけとして始まる第1次献納運動は、上海事変での空中戦の新聞報道等により急速に熱気を帯び、県民号第1号の愛国7「群馬」号をはじめとして、ほとんどの県から献納されている。この時期に献納していないのは10府県で、そのうちの神奈川県、京都、福岡では県庁所在地の市民号としては献納されており、沖縄では報国28「沖縄」号 (昭和8年4月命名式) がある。青森や岩手がこの時期にないのは、凶作や米価下落による不況が影響しているのだろう。興味深いのは、東京と大阪には献納機がないこと。東京は昭和10年に東京防護団からの献納機があるのみで、大阪は皆無である。両都市では、替わって高射砲などの防空兵器献金運動が盛んになっていた。

企業からの献納も始まった。愛国6「日毛」号は川西航空機の川西清兵衛氏が創業者の1人である日本毛織からの献納で、兵士への毛布・衣類による軍需利益の還元という献金であった。富国徴兵保険といった戦前に特有な会社からの献納もある。もちろん、広告活動としての一面も強く併せ持っていただろう。



写真2. 愛国5「小布施」号 (八八式偵察機1型)。昭和7年3月30日、石谷清輔中尉と清田 泉少尉によりハルビンを離陸した本機は敵情捜索後の帰還途中、満洲国吉林省小羅拉密付近で敵弾を受け、通河東方約10kmの松花江付近で行方不明となる。4月8日、機体が地上で焼却されていることが判明した。清田少尉 (殉職により中尉) の故郷、熊本県玉東町には碑が残っている (情報提供: 姫野照正氏)。

小布施氏以外にも個人献納があり、津市の第百五銀行頭取の川喜多久太夫氏 (愛国8)、ラジウム温灸器の発明者で東京理学院の院長 河野 義氏 (愛国9)、大阪の田村駒株式会社社長 田村駒次郎氏 (愛国84)、新橋芸妓屋組合頭取 川村徳太郎氏 (愛国91)、旧華族の蜂須賀 正氏侯爵 (愛国114) などの名があげられる。

本期での愛国号数は、陸軍書類 (国防献品取扱月報) から、次と分かる。

- ・昭和9年12月末で、計112機
- ・昭和10年12月末で、計116機
- ・昭和11年12月末で、計120機
- ・昭和12年7月末で、計124機

昭和10年以降は、急速に下火になったことが窺える。

(2) 第2次献納ブーム (昭和13~15年)

〈歴史背景〉 昭和11年頃より昭和恐慌の終端が見え始める。昭和12年4月・「神風」号訪欧飛行、同年7月・廬溝橋事件から日中事変へ拡大、昭和13年4月・国家総動員令公布、昭和14年5月・ノモンハン事変発生、昭和15年・紀元二六〇〇年

昭和12 (1937) 年の7月20日、朝日新聞が発表した軍用機献納運動 (これが「全日本」号となる) やノモンハン事変の新聞報道が第2次献納ブームを盛り上げる。この期は企業、〇〇組合、△△協会などの中小規模団体からの献納が多いことが特徴である。軍需に関連しないと思われる企業ところからの献金も多く見られ、献納主体が企業や団体といった小さなものに細分化していった。

また、不特定多数の全国民的な献金も多くなっており、愛国「大日本」号

などが出てくる。この「大日本」号は全国からの使途未指定献金から献納された機体で、初期のころは「全国民」号 (愛国85) となっていたが、昭和10年に「大日本」号へ名称が変更されている。想像の域を越えないが、昭和12年から発行された愛国切手や愛国葉書による愛国献金も「大日本」号となっているのではないだろうか。

この期では、約350機前後が献納されている。

(3) 第3期 (昭和17年~)

〈歴史背景〉 昭和16年12月・太平洋戦争勃発、昭和18年5月・アッツ島玉砕、昭和19年春・空襲はじまる、同年11月・マリアナからのB-29の空襲始まる

太平洋戦争の開戦前から政府により始められた「1月50銭献金運動」の軍費調達がこの時期に献納機として結実してくる。昭和16年12月30日献納手続きの「八王子織物」号 (愛国681号)、半年後の昭和17年6月28日手続きの同じ八王子市の「堤」号 (愛国1218号) と、献納手続き日付が判明している例だけを見ても、この半年で500機以上が献納されていることが分かる。

さらに、ガダルカナル撤退やアッツ島玉砕など引き金に、地方自治体レベルでの献納運動が一気に高まっていく。この期は、市町村や郡といったより小さな地方自治体レベルが中心で、判明している限りでもかなりの数が献納されており、ほぼ全国的に献納されたとみてよいだろう。言わば「一村一機献納」状態であり、この背景には「翼賛」という全国規模の運動団体によって、各県で競うように強制的な献納運動が展開されたこともあろう。

図1. 愛国番号と命名式期日(愛国500号まで)

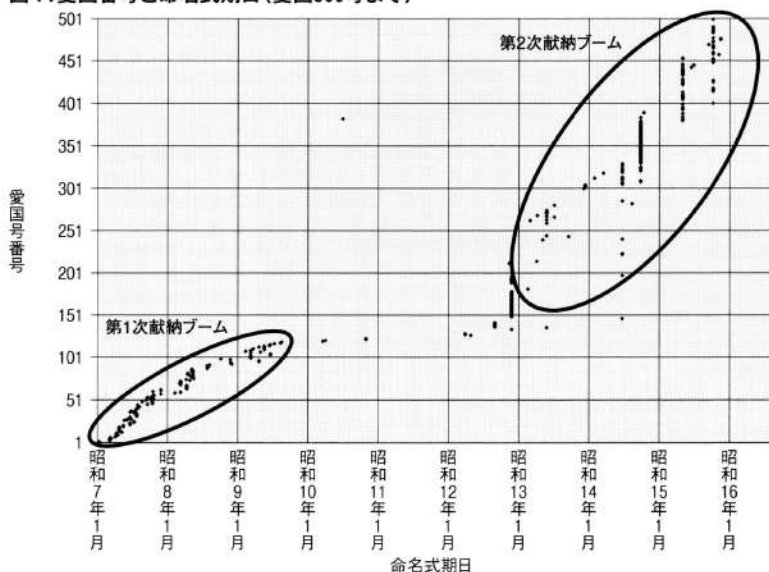
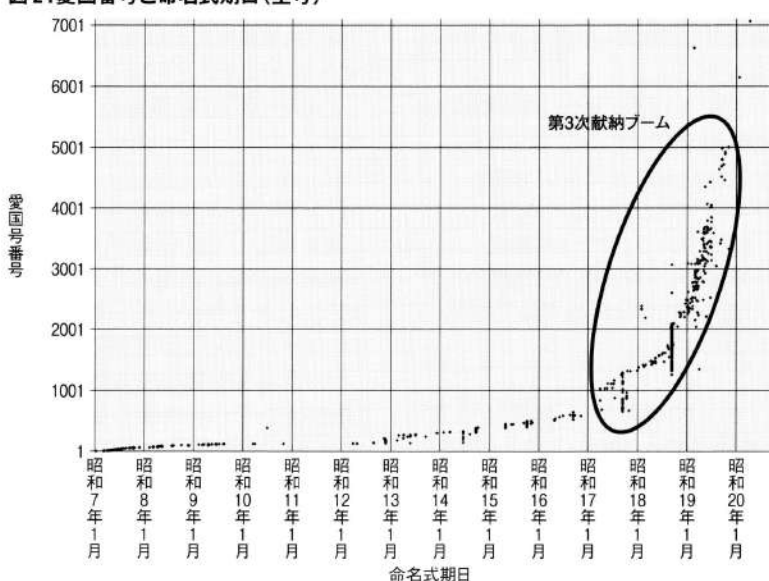


図2. 愛国番号と命名式期日(全号)



一例を挙げれば、長野県では100機(報国号を含む)を計画し、116機を献納した例も判明している。この時期の多くが、こういった団体運動による地方自治体名義の献納機である。

また、戦時体制が強まり、公共性の強い業種(電力会社、銀行等)から次第に統制、すなわち国家のための業界再編が強まり、会社統合や清算が行なわれ始めた。その精算金等で献納された機体も少なくない。加えて、会社や組合(労働組合は産業報国会という組織になっていた)等で、一日戦死離金として一日分の棒給をそのまま献納す

る運動もあちこちで見られた。

この期は、翼賛関連団体や産業報国会に主導された強制面のきわめて強い、「国民総錬金運動」の様相を呈している。昭和17年秋の命名式ではまだ愛国1000番台号だったものが、昭和18年夏で3000番台号が、昭和19年秋にはもう6000番台が献納されている。機数の劇的な増加に、驚くばかりである。

愛国号は何機あった？

愛国号は、何号まであったのだろうか。筆者が知り得ているなかでは愛国7169「浄土宗法泉寺板部」号、昭和20

年3月献納、三式戦)がもっとも大きい愛国号番号である。おそらく欠番はほとんどなく、この愛国号番号数と同数機(すなわち、7,000機以上)が、献納手続きされているだろう。

ただし、これだけの数が実際に飛行機となり得たかと言うと、かなり疑問視される。昭和16～20年に生産された戦闘用航空機(陸海両軍合計52,000余機とされる)比して、献納機数があまりにも多いように感じられるからである。海軍の報国号も5,000機以上が判明しており、合計12,000機前後となるが、これは戦闘用航空機生産数の2割強を占める。献納機自体は軍の生産計画外だったはず(組み込まれていた可能性もあるが)で、計画外が2割以上もあるなら資材調整どころではないように思われるからである。機体のみならず、エンジンもなくてはならない。

戦争終盤では生産計画自体の遂行もままならなかっただろうことから、献納された金額は飛行機建造費としてではなく、実際には一般戦費として用いられたと考えるのが妥当であろう。

さまざまな献納者

いまでは想像しにくいさまざまなところから献納されている。時代の様相が窺える、特徴的な献納者を列記してみる。

(1) 宗教団体

昭和8年春の愛国87「佛立」号(大阪本門佛立協会)を先頭に、愛国112「遍照」号(密教護国団)、愛国127「カトリック」(長崎県カトリック教会)など、神仏基の三教だけでなく、仏教にしても各宗派から献納されている。また、それだけにとどまらず、地方支部などからも多くの献納が見られる。初期の自発的性格の強い献納もあるようだが、戦時体制下での教団自らの統制的な献納を窺わせる。

宗教関係と思わせる献納機には、大阪の四天王寺からの愛国4351～4354がある。これらは、寺名の四天王にちなんで「持国」「増長」「広目」「毘沙門」と命名され、操縦席に仏像が設置されたと新聞記事にある。また、靖国神社

の大鳥居を供出し、その醸金で献納された「靖国神社」号（愛国番号不明、三式戦）も新聞で報じられている。

（2）学校・教育団体

学校関係者からも、初期から多くの献納があった。

愛国23「中学生」（全国中学生）を嚆矢として、愛国30「女学生」（全国女学生）、愛国31「児童」（全国小学生）。愛国111「大学高専」（全国大学生・高専生）などが、それである。

女学生号は、その名前故の人気のせいでだろう。愛国241「第二女学生」、愛国2256「第三女学生」も献納されている。

（3）医療団体

医療団体からの献納機は、患者輸送機がほとんどである。なお、従来の市販書籍では、愛国136号はフォッカー・スーパーユニバーサル改造患者輸送機とするものが多いが、日本赤十字社から提供いただいた資料（『少年赤十字』、昭和13年7月13日号）や絵葉書、陸軍書類において「小型患者輸送機」となっていることが確認できた（写真3）。

（4）デパート

東京の大手百貨店からの献納が見られ、三越や松坂屋からは複数機の献納が判明している。

愛国77、381、382「三越、三越第二、三越第三」

愛国215、1031、1032「松坂屋、松坂屋第二、松坂屋第三」

また東京の百貨店だけでなく、名古屋や大阪、福岡といった地方都市の百貨店からも献納があった。

（5）航空関連団体

航空関連団体からの献納機で判明しているのは、愛国311「航空計器」号（航空計器11社）、愛国556「航空婦人」号（航空婦人会）、愛国1632「富士計器」号（富士航空計器）などで、判明数は少ない。

戦争終盤では、愛国6960「群馬今井」号が関連航空機メーカー（および関係者）から献納された機体であり、四式戦だった。

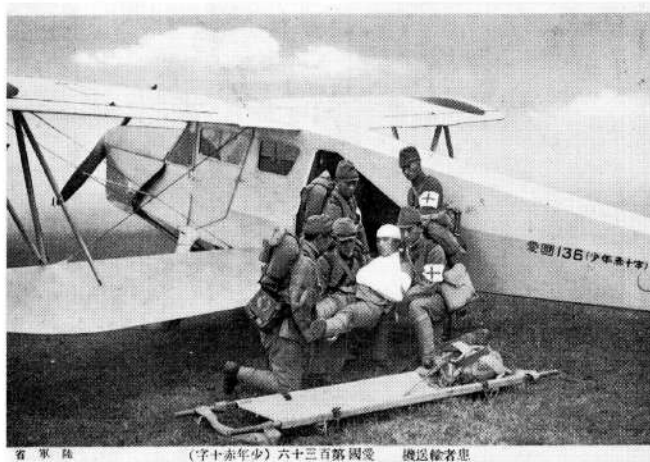


写真3. 愛国136「少年赤十字」号が小型患者輸送機であることを示す絵葉書。

省 軍 陸 (字十赤年少) 六十三百第 愛 機送輸者患

（6）船舶運輸関係

船舶運輸関係会社から軍用機を献納することは奇異にも思えるが、軍に所有船舶が徴用されており、その関係で献納したものと考えられる。愛国307「北日本汽船」、308「中村汽船」、311「福洋汽船」などの番号が近いのは、業界で献納を示し合わせたものであろう。

（7）新聞社

朝日新聞社の提唱による軍用機献納運動が知られており、この「全日本」号は、1次～12次におよんで献納されたことが分かっている。

また、おそらく朝日新聞に対抗するかたちで、大阪毎日新聞と東京日日新聞両紙が、戦線と銃後を繋ぐ郵便物（軍事郵便）運搬用に「軍事郵便」号（10機）を献納している。加えて、西日本新聞などの地方紙からの献納も判明している。

（8）東京市民号、大阪市民号

愛国1563～1579「東京市民」号の17機（昭和18年6月命名式）は、報国号18機と合せて献納されたもので、当時の東京35区名が命名された。

この動きは大阪にもあり、当時の22区名を与えられた愛国号、報国号が11機ずつある。

（9）その他の団体

大日本青年団などの戦時色の強い団体はもとより、大日本相撲協会（愛国313「相撲」号）や軍用機俳優号権能協

会（愛国1164「俳優」号）、華道池坊、茶道の千家、裏千家などの文化団体からの献納もある。

特殊な団体としては、海外邦人会（北米南加同胞、バレー日本人会連盟、在ブラジル中央日本人会など）や、全国刑務所収容者有志による愛国271「赤誠」号、全国町村会関係車からの献納（「町村会」号、「町村会長」号、「町村会吏員」号）が、また全国特定郵便局長、衆議院代議士からの献納もある。

さらに、各県の県警関連団体が献納した愛国号も判明しており、全国的に展開された献納運動があったようだ。

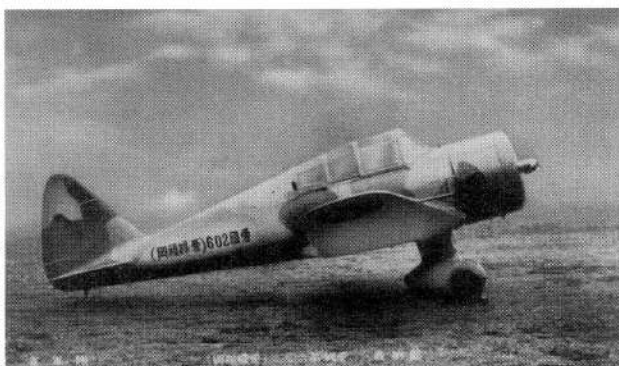
（10）婦人団体

愛婦〇〇、〇〇国婦、〇〇日婦という愛国号がある。これらは婦人団体からの献納機である。

もっとも古い愛国婦人会（愛婦）は明治34年に成立されており、昭和16年に創立40周年を記念して献納運動を開始、その年の夏～秋に40機（陸軍に22機、海軍に18機）を献納している。愛国589～610がそれである。

一方、昭和7年に大阪で設立された大日本国防婦人会（国婦）は急速に巨大組織となり、各地方本部単位で献納している。愛国384「祇園国婦」、470「石川国婦」号は、その先鞭である。

その後、愛国婦人会と大日本国防婦人会、それに文部省により設立された大日本連合会は、昭和17年2月に軍の主導で大日本婦人会（日婦）に統一された。そこからの献納は、愛国1748「一



郷軍人会の各団体、陸軍諸部隊となっている。8ページほどの写真のほかは、献納品一覧と献納美談が掲載されているが、この献品一覧表は興味深い内容を示している。表1に示す（グレイ欄は筆者）。

1点目は、グレイ欄（愛国11「長岡」や47「大分」など）に「機体」と記されていることで、これらはエンジンを含まない献納機である。一方、愛国21「朝鮮」号の完全装備というのは、無線機、爆撃照準器、爆弾架、武装などのフル装備ということだろう。別稿にて後述するが、完備機を受領するのが陸軍としての基本だったが、早期から例外的な献納があったことが窺い知れる。機体価格の約半分がエンジンであり、同じ献納機でも金額自体にはかなりの違いがあっただろう。

2点目は、飛行機部品だけの献納（スミベタ欄）があったことが目を引く。お

宮日婦」、愛国3579「栃木日婦」などが判明している。

『満洲事変 国防献品記念録』から

初期の献納機では、献納を記念して記念誌や報告書などが献納者により作成されている。各献納機単位で作成されたものに加え、陸軍からの謝意を表すべく作成された『満洲事変 国防献品

記念録』（昭和8年8月、陸軍省、非売品）というものがある。陸軍書類（陸普第四九四四号、昭和8年8月）によれば、国防献品献納者への慰謝と国民教化のために陸軍大臣から贈呈されたもので、その贈呈先は全国各地長官以下自治体の首長（朝鮮、台湾、樺太、関東州に関してはこれに準ずる行政区の長）、全国男女中等学校小学校、在

表1. 献納品一覧（『満洲事変 国防献品記念録』より）

機種	数	献納者	愛国号
九一式戦闘機	1	小布施新三郎	3「小布施」
八八式軽爆撃機	1	小布施新三郎	4「小布施」
八八式偵察機	1	小布施新三郎	5「小布施」
八八式偵察機	1	日本毛織株式会社	6「日毛」
九一式戦闘機	1	河野義	9「河野」
八八式偵察機機体	1	長岡市民	11「長岡」
九一式戦闘機	1	群馬県民	7「群馬」
八八式偵察機	1	朝鮮官民一同	10「朝鮮」
九一式戦闘機	1	川喜多久太夫	8「川喜多」
八八式軽爆撃機	1	富山県民	12「立山」
九一式戦闘機	1	石川県民	13「石川」
八八式軽爆撃機	1	帝国生命保険会社	22「帝生」
八八式軽爆撃機	1	兵庫県教化団体連合会	19「兵庫」
九一式戦闘機	2	第十師管官民	17「岡山」
			18「第十師管山陰」
九一式戦闘機	1	朝鮮民一同	20「朝鮮」
八八式軽爆撃機	1	宮城県民	15「宮城」
八八式偵察機	1	宮城県民	16「宮城」
九一式戦闘機	1	福井県民	14「若越」
八八式軽爆撃機（完全装備）	1	朝鮮民一同	21「朝鮮」
九一式戦闘機	1	三井鉱山従業員および関係者一同	24
八八式偵察機機体	1	全国女学生	30「女学生」
八八式軽爆撃機機体	1	全国中学生	23「中学生」
八八式軽爆撃機	1	徳島県民	28「徳島」
九一式戦闘機	1	北海道民	29「北海道」
八八式軽爆撃機	1	全国児童	31「児童」
八八式軽爆撃機	1	香川県民	36「香川」
九一式戦闘機	1	千葉県民	27「千葉」
九一式戦闘機	1	京都市国防費献納会	38「京都」
九一式戦闘機	1	小布施新三郎	37「小布施」
九一式戦闘機	1	長野県民	39「信濃」
九一式戦闘機	1	愛媛県民	41「愛媛」
八八式軽爆撃機	2	台湾全島民	25「台湾」
			26「台湾」
九一式戦闘機	1	鹿児島県民	45「鹿児島」
九一式戦闘機	1	愛国朝鮮号献納者一同	43「朝鮮」
八八式軽爆撃機	2		32「広島」
			35「防長」
九一式戦闘機	2	第五師団管下山口県民、広島県民、島根県民	33「福山」
			34「浜田」
患者輸送機	1		40「防長」
八八式軽爆撃機	1	福島県民	46「福島」

機種	数	献納者	愛国号
九一式戦闘機機体	1	大分県民	47「大分」
九一式戦闘機	1	熊本県民	50「熊本」
九一式偵察機	1	愛知県民	49
九一式戦闘機	1	奈良県民	53「大和」
九一式戦闘機	1	岐阜県連隊区管内有志	54「岐阜」
九一式戦闘機	1	秋田県民	55「秋田」
九一式戦闘機	1	新潟県民	51「新潟」
九一式戦闘機	1	佐賀県民	48「佐賀」
九一式戦闘機	2	満洲号献納義金会	62～63「満洲」
小型連絡機	5		64～68「満洲」
九一式戦闘機	1	新潟県民	52「新潟県」
九一式戦闘機	1	和歌山県民	61「和歌山」
九一式偵察機機体	1	新潟県消防組	56「新潟消防」
九一式偵察機機体	1	新潟県学生一同	57「新潟学生」
九一式戦闘機	1	帝国在郷軍人会小倉支部	58「郷軍小倉支部」
八八式軽爆撃機	1	高知県民	59「土佐」
九一式戦闘機	1	富国徴兵保険会社	69「富国」
八八式軽爆撃機	1	埼玉県民	72「埼玉」
九一式戦闘機	1	全東京瓦斯兵器献納会	73「東京瓦斯」
八八式軽爆撃機	1	栃木県民	70「栃木」
八八式軽爆撃機	1	茨城県民	71「茨城」
九一式戦闘機	1	全国金孫号献納会	60「金孫」
九一式偵察機	1	宮崎県民	75「日向」
九一式戦闘機	1	三越重役社員一同	77「三越」
九一式戦闘機	1	日清紡績従業員一同	78「日清紡」
九一式偵察機	1	生保証券会社	80「生保証券」
九一式戦闘機	1	山梨県民	74「山梨」
九一式戦闘機	1	東京電燈会社	83「東電」
九一式戦闘機	1	田村駒次郎	84「田村」
九一式戦闘機	1	国防献金労働協会	79「労働」
飛行機部品	4	スタンダード靴会社	—
九一式戦闘機	1	本門仏立協会	87「佛立」
九一式戦闘機	1	産業関係者其の他有志	86「産業協働第一」
九一式戦闘機	1	全国飛行機献納団	85「全国民」
八八式軽爆撃機	1	山形県民	76「山形」
九一式戦闘機部品	1	内外運送会社	—
九一式戦闘機	1	国際通信運送会社代理取引店従業員有志	88「通運」
九一式偵察機	1	川村徳太郎	91「川村」
飛行機用改造プロペラ、その他	4	東京電燈会社	—
九一式戦闘機	1	千葉県民	90「第二千葉」
九一式戦闘機	1	横浜市国防資金献納委員会	92「横浜」

そらく、金額的に1機分に満たなかったのだろうが、どういう風に取り扱われたのだろう。同様に、昭和9年4月でも、愛国60「金鷄」号や同62、63「満洲」号用に金属製プロペラが献納されていることから、部品の献納は継続されていたことが分かる。

最後に、献納手続き順序と愛国号の番号が一致していないことである。愛国6号までは一致しているが、それ以外は明らかに献納順番と愛国号番号が前後しており、とくに献納機種が異なる場合に大幅に前後している。これらから、単に献納手続き順に愛国号番号が割り当てられていないことが分かる。どうやって愛国号番号が割り当てられていたのか、究明したい事項である。

朝日新聞の全日本号

前述した全日本号について、朝日新聞社に問い合わせたところ、次の回答をいただいた。

朝日新聞社の「軍用機献納運動」は昭和12年に始まり、20年8月の終戦と同時に終わりました。その間、全国民から寄せられた寄託金で作られ、「全日本号」の名称で贈った機数は陸海軍各150機、計300機でした。

朝日新聞社でもこれ以上の詳細は分からないとのことだが、以降に当時の朝日新聞から追った愛国号全日本号の記事を示す。

●昭和12年7月20日付

軍用機献納運動の開始を報告。

●昭和12年9月1日付

全日本号と命名、第1次献納として陸海軍にそれぞれ30機ずつ献納。

●昭和12年11月28日付

第2次献納として、陸海軍にそれぞれ15機ずつ献納を決定。愛国号は、戦闘機10機、軽爆撃機5機。陸海軍合計で90機に。

●昭和13年9月11日付

第3次献納として陸海軍にそれぞれ5機ずつ献納を決定。愛国号は戦闘機で、陸海軍合計で100機に。

●昭和15年12月12日付

全日本号は陸海軍合計116機に達し

ている(両軍均等増加とすると、愛国648~655の8機か?)。

●昭和17年9月3日付

昨年9月20日の航空日までで、陸軍機85機、海軍機66機の合計151機。今回、陸軍機(新鋭偵察機4機、新鋭軽爆撃機6機、新鋭重爆撃機3機)の献納を決定(第7次献納分)。

●昭和18年2月8日付

全日本号は昭和12年以来陸軍機71機、海軍機73機に。今回決定された陸軍献納機の内訳は新鋭戦闘機14機。陸海軍機それぞれ85機の合計170機に(機数の合計が昭和17年9月の記事と整合しないが、第8次献納分)。

●昭和18年8月11日付

新鋭戦闘機を陸海軍(海軍機は艦戦)に15機ずつを献納決定、全日本号合計200機に。献納は5回に(献納が5回とは命名式が5回という意味か?)。

●昭和19年2月6日付

新鋭戦闘機を陸海軍に15機ずつの献納を決定、全日本号合計230機に(第10次献納分)。

●昭和19年6月27日付

第11次献納分として、新鋭戦闘機を陸海軍に15機ずつ献納を決定、全日本号合計260機に(陸軍機の内訳は新鋭戦闘機10機、新鋭重爆撃機5機)。

●昭和19年7月25日付

第12次献納分、新鋭戦闘機を陸海軍に20機ずつ献納を決定、全日本号は合計300機に。

全日本号の命名式

「全日本」号は、運動開始からしばらくは命名式を催していなかったが、昭和14年秋になって、それまでの分も取りまとめて、命名式を行なうことになった。

式は、これまで献納の「全日本」号50機に加え、「大日本」号43機、ほかの一般献納機12機を対象として、羽田と大阪第二(盾津)で行なわれた。「全日本」号や「大日本」号はすでに戦線で活躍中なため、代表機(東京5機、大阪8機)を置いての命名式となったが、午後の飛行供覧演習もあってか、羽田は飛行場内外に45万人、大阪は場内だけでも4万余の群集であふれかえった。

表2. 愛国「全日本」号一覧

献納次数	献納愛国号	命名式
第1次	愛国150~159(九七戦?) 愛国160~169(九七軽爆?) 愛国170~179(九七偵察)	命名式なしで戦地へ。その後S14.10に何機かを代表として羽田と大阪第二にて命名式
第2次	愛国225~234(戦闘機) 愛国235~239(軽爆撃機)	
第3次	愛国296~300(戦闘機)	
?	愛国648~649(九七軽爆) 愛国650~655(九七戦)	
?	愛国?(戦闘機3機、新鋭戦闘機1機)	S16.9.20、大阪
?	愛国?(戦闘機2機)	S16.9.20、札幌
第7次?	愛国727~730(偵察機) 愛国731~736(九九双軽) 愛国841~843(九七重爆)	S17.9.21、所沢
第8次?	愛国1449~1462(一式戦)	S18.5.22、羽田 加藤建夫64戦隊長の一周忌の追悼命名式
第9次?	愛国1772~1786(一式戦)	S18.9.20、羽田
第10~12次	昨年9月の命名式以降の、戦闘機45機、重爆5機	S19.11.15、歌舞伎座

軍事郵便号

大阪毎日新聞、東京日日新聞両紙が戦線と銃後を繋ぐ郵便物(軍事郵便)を迅速に運ぶため、通信省の援助を受け、皇紀2600年を記念して昭和15年1月2日の紙面で発表、献金を募ったものが「軍事郵便」号である。

おそらく朝日新聞社の「全日本」号に対抗したものと思われ、献金金額は100万円を予定。途中、九八軽爆級10機(昭和14年末の陸軍資料)から九八軽爆3機、九八直協6機、患者輸送機6機(昭和15年4月の陸軍資料)に機種変更され、中華航空に貸与され運航される手はずになっていた。

『東日七十年史』では、計画発表後3ヵ月で100万円に達し、第1回取り扱い分として55万円にて愛国軍事郵便機5機を製作、すぐさま第2回分として残りの45万で同じく5機を製作している。
・愛国438、439「軍事郵便」、440「軍事大進」、441「軍郵三井」、442「軍郵三菱」(以上、昭和15年5月6日、羽田飛行場にて命名式)。

・愛国466「軍事郵便」、467「軍郵住友」、489「軍郵野村」、490「軍郵大阪商船」、491「軍郵三和」(以上、昭和15年10月12日、大阪第二飛行場にて命名式)。

なお、その後、軍と通信省により「この程度において十分軍事郵便機の使命を達成することが出来る」旨の言明があり、以後の運動は停止、計10機で幕を閉じた。(つづく)